

## 聖徳太子と法隆寺

歴史家たちは、聖徳太子（574～622年）を日本の仏教の開祖、そして日本の歴史上最も影響力の大きな政治指導者のひとりと見なしている。聖徳太子の肖像はかつて1万円札をはじめとする紙幣に描かれていた。日本を「c」と初めて呼んだのも聖徳太子である。

聖徳太子は31代天皇である用明天皇（518～587年）の息子として生まれた。子供の頃からさまざまな学問を身につけ、大人になると仏教について幅広く講義を行い、書物を記した。当時の日本の政治と文化の中心であった明日香に住み、そこで中国との外交的なつながりを維持し、中国の民法典や官僚制度を日本に取り入れることに尽力した。聖徳太子の宮殿は、法隆寺の東側に建てられていたとされている。法隆寺とその周辺には聖徳太子にまつわる事蹟が数多く残されている。その重要な例のひとつが夢殿である。この建物には聖徳太子の等身大の像が収められており、聖徳太子ご自身として崇められてきた。

聖徳太子に対する崇敬の念は、彼の死後さらに強まっていった。死後の聖徳太子は仏教の聖人のひとりとなり、熱狂的な崇拝の対象となっていった。法隆寺では、聖徳太子が仏教の普及において果たした貢献の大きさを随所に見とることができる。そもそも父親である用明天皇が自らの病の治療を祈願するために仏像の造頭を願われたが在位2年で亡くなられ実現しなかった。その後、約20年が過ぎてしまったが、聖徳太子は叔母に当たる推古天皇とともに用明天皇の生存中の願いであった寺院の造営に着手され、607年頃に完成したのが創建法隆寺である。

しかし、その伽藍は670年に焼失したと伝えられ、その後、まもなく再建されたであろう現法隆寺は聖徳太子等身の釈迦如来像を本尊とする寺院として生まれ変わり、中国から朝鮮半島を経て伝わった飛鳥時代の建築様式を伝える伽藍とともに1300年の歴史を歩んでいる。

往時はのどかな農村風景の中に堂々たる威容を示す壮大な伽藍が姿を現し、新たな文明の時代の到来を告げるものであったであろう。1993年法隆寺はそういった周囲の地域も含め、日本で最初となる世界文化遺産に登録された。